

J.H. カンペ教育思想の研究 －啓蒙主義教育思想再検討の一環として－

山内 規嗣

(広島大学大学院教育学研究科)

汎愛派教育思想の歴史的な研究については、二つの傾向に大別できる。ひとつは、19世紀初頭の近代教育学の確立期においてすでに指摘されていた汎愛派教育思想の方法主義的・技術主義的性格を主題とするものであり、パンロッシュの研究(Pinloche, A., Geschichte des Philanthropinismus. Deutsche Bearbeitung von Rauschenfels, F. und Pinloche, A., Leipzig, 1889/1896)に代表される古典的研究の大半はこれに属する。この中には、汎愛派における教育技術への傾斜を、新人文主義的な人間理念や近代的な国民教育理念の観点から否定的に評価する研究、あるいは学校教育の方法と制度の改革への寄与という観点から肯定的に評価する研究などがあるが、いずれも汎愛派教育思想をルソー的な自然教育の実体化という文脈のみにおいて捉えようとしており、汎愛派教育思想家の代表的人物であるバゼドウやトラップ、ザルツマンらの教育思想の個別研究もこの文脈にある。これに対して、近年の研究におけるもうひとつの傾向では、ブランケルツによる職業陶冶論としての汎愛派教育思想研究(Blankertz, H., Berufsbildung und Utilitarismus, 1963)をはじめとして、汎愛派の言説のなかに近代教育学の諸理念の源流をとらえる試みが数多くなされている。この中には、近代教育学批判の延長上においてその問題を汎愛派に遡及させる研究や、汎愛派教育思想の前近代性を国家・社会による目的規定に見出す研究が認められる。

ところで、これらの汎愛派教育思想研究における主要な問題点は、J.H. カンペ(Joachim Heinrich Campe, 1746-1818)の位置づけにあった。このカンペは汎愛派のいわゆる第二世代に属し、児童・青少年文学作品のベストセラー『若きロビンソン』(Robinson der Jungere, 1779)の作者として、また『エミール』のドイツ

語訳を含む全16巻におよぶ一大教育論集『教育の総点検』(Allgemeine Revision, 1785-1792)の編集者として、さらにドイツ語辞典の編纂者としても名高い。しかし、教育学的な主著を特定しがたいカンペの教育思想は、汎愛派を方法主義的に理解する研究においてはバゼドウたちの陰で付帶的にのみ言及され、また近年の研究動向においては、近代から逆照射された、あるいはその広範な活動領域の特定部分のみを対象としたカンペ像の構築がなされてきている。しかし、啓蒙主義が本来有していた人間・社会全般に対する理性的批判の包括性をあらためて確認するとき、狭い意味での教育学にとらわれないカンペの教育思想の広がり、ドイツ啓蒙主義の基本的性格を体現するものとして、むしろ積極的に捉えられるべきものである。とくに、カンペの教育的著作が一貫して人間の Seele を主題としているのを見ると、ドイツ啓蒙主義がまさにこの Seele を重要な問題とし続けてきたこととの一致が、カンペ教育思想をドイツ啓蒙主義との関連において再検討するための基本的な手がかりとなるのである。

したがって、本研究の第1の課題は、この Seele 論を中心とするカンペ教育思想の形成を、ドイツ啓蒙主義の主要問題との関連において整理することにある。青年期に啓蒙主義の哲学と神学を学んだカンペは、ベルリンなどでの教育的実践や啓蒙サークルへの接近を契機として、自らの啓蒙主義的思想を教育論へ構築していく。その実践的営為は、当初は主として啓蒙主義雑誌における批評的活動や論考発表など、広い意味での啓蒙を指し示す活動として現れたが、やがてそれは、18世紀後半における反理性的潮流への危機意識を媒介として、Seele への具体的な教育関心として結実する。

カンペ教育思想における Seele 論についての先行研究は、上述の諸研究も含めてそのほとんどが、心理学的あるいは宗教教授論的観点からの内容吟味を行うものである。すなわち、今日の教育学がその教育技術の自明の基底とする心理学 (Psychologie) をカンペの Seele 論に投影し、その有効性において評価を下すものや、宗派的観点ないしは近代学校教育制度の枠内での有効性という尺度から、カンペの教育思想を批判するものである。さらに、カンペについて包括的解釈を行ったフェルティヒの研究 (Fertig, L., Campes politische Erziehung, 1977) ではこれらの両者を市民的道徳性形成論 (Sittenlehre) のなかに包摂しようと試みて

いるが、カンペ教育思想の内部に近代性と前近代性の矛盾を確定するという結論において、結局両者は分断されたままにある。本研究において Seele に「心」あるいは「魂」などという訳語をあてずに原語のまま用いるのは、このような心理学的ないし神学的な枠組みへの限定づけを回避し、ドイツ啓蒙主義が問題とした Seele という概念の含意をそのまま主題化するためである。この視座にたつカンペ教育思想再検討の試みにおいて、カンペの著作をはじめ多くの史・資料は、ヴォルフエンビュッテル・アウグスト公図書館を代表とするドイツ本国より直接その複写を取り寄せることとなった。

本研究の構成は、大きく4つの部分からなる。まず第1章「ドイツ啓蒙主義とカンペの思想形成」では、上述の問題関心から、Seele に対するカンペの教育的問題化の過程を、カンペの前半生における自己形成と啓蒙主義的活動の展開のなかに確認した。ここでは、ドイツ啓蒙主義の Seele への基本的問題関心を確認しつつ、カンペがその啓蒙主義雑誌への論考やプロイセン王太孫教育草案などを通じて、その教育的視野に Seele を収めていくことを明らかにした。次に、第2章「カンペ教育思想における Seele の主題化とその具体像」では、このようなカンペの Seele への関心が、当時の感傷主義という文芸的潮流の反理性的傾向に対する危機意識を通じて、Seele そのものを子どもに自覚化させる教育論を『子どものための心理学』(Kleine Seelenlehre für Kinder, 1780)として構想するに至る過程を、主に彼自身の著作から考察した。この危機意識がドイツ啓蒙主義者の共通認識であったことは、カンペが敬愛するレッシングの対応を材料として確認された。カンペの「子どものための」Seelenlehre は、子どもに自らの Seele を自覚化させ、その諸力・諸能力を「先概念」として認識させることを通じて、子ども自身が感傷主義などによる虚偽の感情とその非理性的傾向を自ら対象化して自律的に対応できるようにするためのものだった。第3章「宗教教授論としての Seelenlehre」では、カンペのこの Seelenlehre における宗教教授論的性格を『教育論集』(1778)所収の諸論考をもとに考察し、さらに啓蒙主義雑誌に掲載された Seele の不滅性についてのカンペの試論から、彼の Seele 論の原理的問題とその啓蒙主義的な基本性格を検討した。ライプニッツ以来のドイツ啓蒙主義が有していた Seele 論への関心、すなわち人間と神との関係における表象力としての Seele への要求は、カ

ンペの試論のなかに継承されていた。また、カンペの Seele 論における概念教授の特性をより明確化するために、カンペと同じく汎愛派の代表的人物であるザルツマンとバゼドウの教育思想における Seele 論を抽出し、比較検討を行った。汎愛派教育思想に対する従来の技術主義的という批判は、彼らの Seele 論を通じてとらえた教育思想において確認されたが、それらとカンペの Seele 論の間には一定程度の距離が存在している。最後に第4章「後期宗教教授論とその問題」では、時代の反啓蒙主義的な趨勢のなかで、心情と理性の均衡に基づく教育の困難性を認識したカンペが、理性の優位を確実にするための宗教教授論を構成するに至る過程を明らかにした。感傷主義のみならず、ヴェルナー反動期における国家・教会からの圧力で、カンペの学校教育改革は挫折を余儀なくされ、著作活動に制限を設けられた。人間と社会の理性的改革へのこの逆流は、フランス革命への対抗努力によってさらに強化されていくが、カンペはこれらの反啓蒙的潮流への危機意識によって、あらためて理性に基づく人間の完全性の追求を可能とするような Seele 論の再構成へと向かわざるを得なくなる。この結果、『若きロビンソン』では心情に基づく教育に関する叙述が理性的・概念的教授の方向へと明らかに修正された。そして『宗教教授の手引き』（1792）では、カンペは、すでに子どものうちに消しがたく存在している理性への不安を、信仰への理性的教授を通じて啓蒙主義の幸福論に基づく Seele の平安へと再び回収しようと試みる。ここにおいて、啓蒙主義における宗教の道德化は、道德の宗教化へと転回する。このような Seele 論の展開を踏まえて、補節としてカンペの女子教育論における Seele 論の位置づけを検討し、そこに理性と心情の関係と重なる問題性を見いだした。

本研究で得られた成果は、第1に、カンペの教育思想の基軸を Seele 論に見だし、ここから彼の主要な著作をほぼ包括的に把握しえたということである。それは、先行研究が注目してこなかった『子どものための小心理学』を中心にすえ、同じく周縁的に扱われてきたカンペの啓蒙主義雑誌掲載論考を素材として媒介させ、カンペの代表作と言われる著作を結びつけていく作業によって達成された。第2に、これによってドイツ啓蒙主義教育思想の主流としてカンペ教育思想を捉え直し、またカンペを通じてドイツ啓蒙主義教育思想を再検討していくという新たな観点を導入可能にしたということである。展望としては、この研究によっ

て、従来は近代教育学とその批判の文脈において理解されてきた啓蒙主義像を、啓蒙主義本来の文脈のなかであらためて内在的に把握するための手がかりが与えられたと考えられるが、その具体的検討の手続きや、この観点からの近代教育学と国民教育論へのすじみちの再検討などは、現時点ではあくまでもその可能性のみが指摘される。